

十字路で立ち話抄一〇十四年一月～一〇十五年十二月

地名

吉田惠吉

天秤棒	1
脈絡	2
姿勢	3
ゴム長	4
風月	5
冬のキノコ	6
雪玉	7
雪見橋	8
着崩れ	9
帆柱	10
潜り戸	11
冬に遊べば	12

目

次

指切り	13
巻貝	14
掌上滑り台	15
脚立	16
紐解き	17
春支度	18
幕間	19
挨拶	20
補助線	21
千鳥足	22
欠本	23
傍系	24
雨の紐	25

油差し	26
些事	27
仮設	28
目印	29
眺望	30
透視	31
緑の残雪	32
尋ね人	33
うたた寝	34
骨絡み	35
誰かへ	36
六月の	37
壁の泡	38
旅日記	39

塩梅	40
足場	41
朝露	42
交叉	43
折り合い	44
浮輪	45
呪海	46
驟雨	47
開栓	48
接ぎ木	49
相引き	50
夏山	51
夏草	52

振り直し	53
素潜り	54
釣果	55
在宅風信	56
固有像	57
読書三昧	58
尋ね人	59
逡巡	60
黙視	61
遠足	62
排砂	63
礼節	64
ずれ	65
鳥籠	66

つむじ	6
置物	6
自然人	6
雨宿り	7
あわい	7
孫の手	7
早さ	7
体癖	7
写生会	7
逸脱	6
地名	5
翻譯	7
回遊	7
	8
	9

境界線	80
凋落	81
反転列車	82
ボーデにて	83
邪魔	84
哀惜	85
複製	87
戯画	86
些事	88
消失	89
竹とんぼ	90
煤払い	91
通勤車窓	92
着雪	93

破碎	94
放出	95
圈外	96
献立	97
形態	98
時間割	99
墨跡	100
瞬殺	101
無人駅	102
雪かき	103
董雪	104
雪兔	105
不死鳥	106

九十九折	107
寒氣	108
刷毛	109
つらう	110
徒花	111
点描	112
土筆	113
春の渡し	114
無構え	115
通過	116
偽装	117
分身	118
初回	119
土手桜	120

急須	1	2	1
関所	1	2	2
鞘	1	2	3
分歧	1	2	4
下流	1	2	5
胴乱	1	2	6
依存	1	2	7
残響	1	2	8
前兆	1	2	9
蟻とフラミンゴ	1	3	0
露出狂	1	3	1
飛び縄	1	3	2
手解き	1	3	3

姿勢	134
縦横	135
息災	136
新緑	137
古今	138
安泰	139
体軸	140
落ち梅	141
捨鉢	142
上半期	143
アングル	144
未踏峰	145
無免許	146
構図	147

無抗原	148
梅雨明け	149
午前の小舟	150
虫捕り	151
夏座敷	152
蔓草	153
初飛行	154
夏の響き	155
郷愁	156
風土	157
晩夏	158
竹とんぼ	159
結び目	160

壁抜け	161
相聞	162
背後	163
吐息	164
老い目	165
周回	166
河川敷	168
白紙	167
夜間飛翔	169
柿もぎ	170
同郷	171
岐路	172
構え	173
綾取り	174

痺れ	175
なぞる	176
筆圧	177
残量	178
手数	179
薄暮	180
コマ割り	181
外野にて	182
寂幸網	183
きりもみ	184
無縁	185
カラス	186
中途半端	187

行きずり……188

姿勢……189

隙間風……190

絵本……191

過不足……192

身丈……193

分身……194

過ちて……195

天秤棒

快晴の山並みが
照り返している
スキー場あたり

滑ることを知り
上達することを
学ぶために調べ
学ぶために調べ

道具と身体とが
一体化するまで
考え続けながら

気付かなくても
呼び覚まされて
繋ぎ合わされる

単純な動きから
組み合わさつた
動きへ統合され

抜けだすまでの
びっくりできる
小躍りも束の間
(14.01.07)

脈絡

週一時間出勤の
再開を待つてた
グラデーション

雪明かりと風が
見慣れた風景を
異様に浮遊させ

隠された普通の
暮らしの諸相が
夕闇を彩り始め

人相書きが宿す
耕された来歴が
浮かび上がって

正視に耐えない
弱さを見つめる
冥想のきつかけ

関節の動具合を
聴取つた内臓が
唄いだしそうに
(14.01.10)

姿勢

どんな高見から
降下する冷氣に
乗り合えたから

忘れてしまつた
凍り輝く冷氣を
眺めている姿勢

地表に舞い降り
溶けゆくまでの
結晶のひととき

組み合わされた
脚に立つた腰に
両肩が落ち込み

座布団を離れて
浮遊する球体が
俯瞰する座右か

冥想の呼吸から
はじまる姿勢が
頭頂を吹き抜け

(14.01.14)

ゴム長

水鳥の影少なく
光と風が揺らぐ
城址の掘り割り

山並みが川面に
まばゆく映える
雪のない河川敷

無雪の成人式に
こつそり紛れて
抜けだし半世紀

田舎から郊外へ
居所を新築した
冬場の引越しも

産気づいてきた
ヨメを産院へと
連れ添つた時も

履き潰す長靴が
雪の少ない冬に
句読点を打つて

(14.01.17)

風月

まんまる寒月が
庭先で見上げた
雲間を刺し抜き

弛んだ雪吊りで
絞め殺すように
樹木の影が凍る

夜の山並みから
張り巡らされた
風が眠りはじめ

聞き耳を伏せた
家並の設計図を
測量する風向き

月光をかき消し
降り出した雪に
地下水が跳ねて

夜道を足で穿つ
遊牧民の鼓動が
側溝伝いに聞え
(14.01.21)

冬もほころぶ
暖かい日和の
船底で水漏れ

古びた楽器が
奏でる音楽に
聴き入る耳が

見たことない
生死の行方を
人称で数えて

落ち葉を拾う
手の隙間から
草が生え伸び

求愛の物語に
混じり込んだ
嘘を抜き取り

ここまで深く
人称を失つて
腐り果てれば
(14.02.04)

雪玉

誕生日の雪を
風信のように
握りしめたら

目覚めた朝が
同じ零下でも
肌触りが違い

ゲレンデでも
雪質の変化に
足裏が笑つて

コーヒーから
立上る湯気には
溶ける屋根雪

落雪に驚いて
飛び去る鳥を
撮り損つたら

どんな笑顔で
四十過ぎから
生き延びるか
(14.02.11)

雪見橋

、）から先は
行こか戻ろか
橋の袂に立ち

自在な滑りの
コース選びが
明暗を分けて

○×記入より
複数課題から
設問選択解答

答え易さより
難しさを選ぶ
教室の学生に
思いがけない
レポートなど

十五ばかりの
橋桁を数えて
欄干が揺れる
(14.02.14)

着崩れ

明るい窓の外で
雪が舞うように
視界の手前でも

捉えようとして
定らない呼吸が
身構えたりする

建物を吹抜ける
風が光り輝けば
影が響き渡つて

動きについてる
呼吸が呼び込む
乱れを着込んで

お互いが邪魔に
ならない個々の
動きが協働して

授業で一度でも
自分に聞えない
喋りができたら
(14.02.18)

帆柱

残雪を避けて
まだら模様に
樹影が連なり

腕組みをして
岸辺を探せば
流水の歯軋り

取り残されて
自問自答する
うねりに沈む

碎けた明日の
姿勢を変える
風向き知らず

帆を立ち上げ
巡らす問い合わせ
揉み解されて

そゝかゝゝか
あるやなしや
眺めせしまに

(14.02.25)

行けるところまで
なんて言つても
いいかげんだが

たいして汗など
かかるいうちに
息切れしそうに

働き続けるうち
結婚して建てた
住まいを維持し

リタイアすれば
老いゆく母親の
介護のかたわら

教室と体育館を
往来する距離も
近くて遠くなり

広がる裾野から
見えない頂まで
何枚の潜り戸が
(14.02.28)

冬に遊べば

朝陽に浮かんで
水蒸気が逃げる
弥陀ヶ原の傾き

3月初めにして
ひと滑りごとの
ゲレンデの雪質

アイスバーンで
身体を固めすぎ
バランスを崩し

シャーベットで
動き過ぎ固まり
バランスを崩し

新雪斜面ならば
自重をしつかり
乗せたラインで

知りえなかつた
身体の使い方の
外へと滑り始め
(14.03.05)

指切り

板書している
背中目がけて
ぶつかる前に

庭に入り込む
猫の気配など
家の奥に居て

日本刀の鞘に
抜き差しする
曲線を走れば

いつ開こうか
水差しの花が
戸惑つたまま

渦巻くように
霧吹きを押す
指尖の問掛け

持つ間もなく
握っているか
掴んでいるか
(14.03.07)

山と平野を
隔てながら
立ちこめる

朝靄の向う
溶ける雪を
追いかけて

畦道を辿り
落の臺など
探し歩けば

見下ろした
前足飛越え
谷筋へ獸道

暖かすぎる
リフト上で

植物の微睡

動物の匂で
目覚めたら
骨を響かせ
(14.03.14)

掌上滑り台

昨夜の満月に
晒された梅が
一気に膨らみ

1シーズンに
4 K k m以上の
滑走距離より

その日の滑り
それぞれ違う
愉しさの数々

前に進むから
背後を気遣う
闇夜の心地に

銀河の果てへ
生死を問わず
読み書き計算

身体の各層に
掌をめぐらし
紙飛行機投げ
(14.03.18)

脚立

どうしても
書架高くへ
読み終え本

爪先立つて
取り出せば
掃除届かず

木製脚立に
上り見渡す
読書履歴も

読み繋いだ
本の記憶も
埃まみれで

脚立に座り
拾い読めば
椅子に化け

新着初刊を
開く脇机に
早変り脚立
(14.03.21)

紐解き

紅白前後し
花開く梅の
間で外され

柱が抜かれ
背伸びする
庭の植込み

風化の響を
灯すように
石灯籠の傘

搔き分ける
葉脈の奥へ
ほとばしる

乾き具合が
寒冷地から
抜けだして

肌を抜けて
筋肉に触り
骨の髓まで
(14.03.25)

防寒深靴で
歩くことの
なかつた庭

冬の記憶が
取り外され
雪吊りの柱

ひび割れた
スキー靴を
仕舞い忘れ

日陰斜面へ
脱ぎ捨てた
セーターに

春の昆虫が
抜殻を残し
飛去つたら

置き忘れた
蠢く内観を
羽搏かせる
(14.03.28)

幕間

一階窓際から
二階の窓際の
陽射しの下へ

動かすように
タモリの窓が
消えた昼過ぎ

むかつく人も
いけてる人も
みんなまとめ

人物目録から
ゆるキャラへ
綱渡りしても

踏み外さない
サングラスの
奥の深さから

きれもせずに
今日の縄目へ
むなしからず

(14.04.01)

挨拶

庭木の緑より
雑草の伸びに
花芽の春便り

打ち損ないの
スイングから
弾かれた新芽

見つけられた
新しい振舞が
描いた弧から

振り抜き様に
とどけられた
挨拶を交わす

声のありかを
確かめられた
自他が出会い

身体きばきも
組立て直され
無駄も省かれ
(14.04.04)

切詰めすぎた
前年の剪定が
花を咲かせて

したくないや
すべきでない
枠組が薄らぎ

剥がれ落ちた
雪害の破片を
嵌め込んだら

積年の棧から
螺旋を描いて
動きの橋渡し

釘の響き鋭く
打ち込まれた
虚空の身体へ

冥想の朝から
囚われないで
エクササイズ
(14.04.08)

千鳥足

番の鶴鴿が
小走りする
越冬裏通り

川縁や公園

丘陵あたり
いつせいに

花開いたら
見所もなく
通り過ぎて

見境もなく
女子力など
徒花みたい

警戒心から
猜疑心まで
羽搏かせて

散り散りに
擦れ違つて
交叉したか

(14.04.11)

欠本

散り梅枝に
訪れた鶯が
鳴き惑つて

命日の夢に
田舎の地で
居残る母が

嘗んでいる
本屋ならぬ
図書館へと

入り込んで
宮沢賢治の
名作選なら

中巻がまだ
欠けていて
目覚めても

唯一だつた
蔵書の背が
空白のまま
(14.04.15)

タンポポと
蓮花の間で
雉が鳴いて

散り遅れて
花筏めいた
丘陵地の麓

饒舌な嘘が
浮び上がる
梨花の敷物

終わらない
稽古の謎が
立ち上がり

型くずれの
きつかけを
忘れ去つて

あるがまま
しばし掴む
消えゆく道
(14.04.18)

雨の紐

無為や徒労など
街中での暇潰し
場所がなくなり

西部劇をはじめ
時代劇映画など
喫茶店の彼方へ

跡地に座礁して
行き倒れそうな
還暦の身体捌き

しなやかに梳る
春雨が緑の紐で
身体を縛り上げ

乾布摩擦を抜け
普通を見失つた
木の芽時の不調

偏りの気付しが
紐解かれてから
新たな待ち合い

(14.04.22)

油差し

春陽を響かせ
きりもみする
でんでん太鼓

交叉しながら
縁を切り裂く
手裏剣の喉笛

前籠を擦抜け
前輪に絡まる
自転車の鎖を

知恵の輪でも
あしらうよう
外せだなんて

情報のハブを
止めるのなら
まず停電だが

身動きならぬ
もつれを解く
注油の心意気
(14.04.25)

些事

雑草が繁つた
葉陰で昆虫が
小刻みに震え

時間や空間を
圧縮しながら
きりもみして

正解の模写を
図鑑にしても
分類しきれず

届く言葉など
産んで殖して
使い尽すまで

書き損じたら
足止め喰らう
年齢不詳の声

響く未解決な
身体の層から
宇宙の彼方に
(14.04.29)

仮設

庭木を揺らし
慌てふためき
耕耘機が通い

授業の準備に
手間取つて
る
真新しい教室

襟を正したら
葉裏に逃込む
モビルスース

ミラーリング
設定のための
抜け道知らず

教卓に花咲く
赤ちゃん肌の
質間に戸惑い

十数年続けて
予測できない
適切な仕組み
(14.05.02)

目印

乗り手のない
貸出自転車を
数える陽射し

バスと市電が
繋いで見せる
今日の居心地

伴侶同伴だと
iPod 鳴らさず
Kindle も不要

手狭な球場に
埋もれていた
観戦履歴書が

入場者がない
BCリーグの
外野芝生席に

ベンチ席から
立ち上がりつて
覗き込む隣人
(14.05.06)

眺望

僅少差を守り
あるいは逆転
して勝ちきる

吹荒れる風に
萌える緑など
狂つたように

老化の階段に
軟着陸しても
馳せ上り下り

受粉が途切れ
果樹園の端へ
高架橋が伸び

住まいを問う
風水の質問が
廊下を洗つて

強風が磨いた
山脈の視界を
遮らない座り

(14.05.09)

透視

昼夜晴雨かまわず
吹き止まない風に
画鋲でとめた緑が

バラバラ抜け落ち
素足で踏まないで
武芸書を紐解けば

使つたことのない
筋肉痛の在処など
思いもよらなくて

市内バスの窓から
見えたことのある
夜学の同窓生から

送られてきた書の
封を切らずに読む
透視の術を試せど

「労学同帰」やら
「遊学一意」など
当時の四字熟語が
(14.05.13)

緑の残雪

リタイアしたら
ブルーマンデー
がどんな色へと

体力が衰えても
身体反応で占う
パフォーマンス

最高作を問われ
次回作と答える
高齢ピアニスト

再会色鮮やかな
礼文島のウニを
引き立てる食器

街中から聳える
山並みの残雪が
萌える緑に映え

シャクナゲ咲く
山間で鶯を聞く
山歩きの記憶が
(14.05.20)

尋ね人

降りだした雨を
待つてたよう
に傘をさした傍を

すり抜けながら
上昇していつた
抜き身の切つ先

ネジを巻忘れた
手首の古時計が
知らせる傾いた

日々の置み方に
馴染んだような
庭の躊躇の花の

付き具合が庭に
やつてくる虫や
鳥を遠ざけても

花付きが盛んな
新顔の雑草など
誰が運んでくる

(14.05.23)

うたた寝

陽射しの路線を
午前に潜つたら
午後の停留所で

眼を休めてから
映画村を旅して
五感を遊ばせる

毛虫の握力から
蝶の羽撃きまで
圧縮された地図

距離感にと惑う
吹替え版よりも
字幕版に導かれ

休憩する窓際の
蜘蛛の巣に絡む
夕暮のフォント

日が沈む直前の
乗り換え案内に
導かれた覚醒へ
(14.05.27)

骨絡み

中也が詠つて
見つけた骨で
座つて食べて

他人の技から
盗みなさいと
教えられても

肩のあたりに
食べのかした
鶏脚の痛みで

痩れた硬さが
解けたように
動きを消化し

常識に紛れた
街中から外れ
駆け抜けても

埋もれた骨に
行き着く前に
納骨堂で休む
(14.05.30)

誰かへ

朝靄を抜ける
郭公の鳴声に
かき消されて

六月と七月の
星占いの数を
聞き逃しても

誕生月の雨を
着流す上着の
袖を捲りあげ

安く旨そうな
ワインを探し
開栓するまで

頁をめくれば
まるで動めく
図書館みたい

のめり込んだ
ゲームの音も
聞えないほど
(14.06.03)

六月の

蒸し蒸しして
誰も乗らない
エレベーター

鏡の向うから
透けて見える
誕生月の空白

大きな揺れに
転ばないよう
抱きとめられ

薬缶や鍋など
金物屋の軒が
グラグラ揺れ

水田の畔では
打寄せる波で
脚がすくんで

善悪限りなく
もらい受けで
おくりびとに

(14.06.06)

壁の泡

仲間に誘われ
三角ベースで
走り回る前に

ボールを投げ
返してくれる
父が墓の下に

入った年齢の
先がまったく
尻切れとんぼ

世間と向合い
独り相撲しか
取り口知らず

ぶち当たつて
跳ね返される
壁の模様など

クラゲの海で
溺れかかつて
泡立つままに

(14.06.10)

蝸牛のよう
に
雨の舌触りが
通り過ぎたら

巻き戻された
ミニ旅行から
帰つたばかり

草畠れ果てた
ソファで寛ぎ
メモを残して

とつておきの
ケースに挟み
閉じ込めても

窓にかざせば
映画が終つた
心持ちばかり

写し取られて
もぬけの殻が
積み重なつて
(14.06.13)

塩梅

植込みの緑を
突き抜けたら
もう初夏だが

洋傘を逆さに
差し掛ければ
梅の実が降る

イタリックの
活字の窓から
文庫本を眺め

庭先の天日に
色づき並んだ
梅干しの数が

途絶えそうな
その日暮しの
引用の果てで

眠たがつてゐ
身体の部分に
泳ぎ着くまで

(14.06.17)

足場

手足もがれて
授業日を狙う
就活毛虫退治

教科書なんて
図書館利用で
十分間に合う

小・中・高で
まとわされた
殻の脱皮には

十重二十重に
羽搏ける場を
托卵できるか

共感視線から
羽化した手で
受肉を剥いで

骨が剥き出す
静かな動きを
書込む足場に
(14.06.20)

朝露

満杯の除湿器の
水を捨て流せば
落ち梅が濡れて

ジー・パンを脱ぐ
露な女の胸内に
落ちこぼれたか

びつしり朝露に
濡れた渴きから
遠ざかる自転車

ようやく透明な
埋め込み地図で
動きを印刷する

次巻配本までに
整えた骨格から
刈取られた読み

気を交わすなら
刹那を打ち出す
寸止めの身体に
(14.06.24)

交叉

行きも帰りも
跨線道路下を
列車が通過し

待ち合わせた
乗継ぎバスが
目の前を通過

市内バスなら
通過するまで
押しボタンを

控える老婆が
生き残つてゐる
梅雨空の下で

紫陽花が咲く
山手の雷鳴に
水かさが増し

渦巻く川面に
殴り書きして
駆抜ける雨脚
(14.06.27)

折り合い

身体を折畳み
庭で半夏生が
年季を数えて

日々の体操が
習慣のように
織り込まれた

畠の部屋から
起き上がつた
立ち居振舞い

話し言葉から
書き言葉へと
手をこまねき

遣り繰りやら
擦り合わせも
ままならない

無言を頼りに
不器用に絡む
切なげな試み

(14.07.01)

浮輪

遠くの池で
二輪の蓮が
花開いたら

胸の内にも
微妙に響く
二人の唄が

書込まれた
未来が遙か
過去に浮き

沈み揺れて
家計の底に
天窓を穿つ

針を下ろす
誕生月毎に
磨り減つた

不安に浮く
水面を歩く
型を旅して
(14.07.04)

呪海

搔き分ける
空氣の流れ
雨雲の匂い

梅雨空低く
私服を整え
時間を跨ぎ

寄せて返す
波の鞍部で
泡立つ影に

浮足立つて
浮遊すれば
足場が崩れ

当て所なく
腰も碎けて
漢搔くだけ

触れた底で
一度浮かぶ
泳ぎの型が
(14.07.08)

驟雨

迂路の角を
曲がつたら
出会う夏女

溢れそうな
種子を噛む
蜻蛉の目玉

風に煽られ
不時着して
藻搔く脚に

玄関先から
声をかけて
傘を差出す

間も与えず
走り抜けた
ずぶ濡れの

飼主を追う
子犬の背に
跳ねる水玉
(14.07.11)

開栓

剪定作業で
刈り込まれ
花がこない

紫陽花には
刺青めいた
虫喰いの葉

投影された
網目の庭で
組み立てた

祝い言葉を
クリップで
繋ぎ止めた

宛名札付き
名も知らぬ
花の鉢植え

飲み干した
コルク栓を
指折り数え
(14.07.15)

接ぎ木

天蚕と握手した
早乙女山の麓に
飛翔のためらい

立ちすくむ枝が
無意識の谷間へ
払い落としたら

むしゅった泥草を
けんけんばして
蹴り込むように

鉈の切り込みに
食い入る意志が
はめ込まれたら

手足が届かない
まだ見ぬ果実が
たわわに実るか

狂い咲きの夏の
踊り場を踏んで
どんな涼を求め

(14.07.22)

相引き

棒、しを噛む
なんて書いた
はるか昔だが

手に手をとり
まさぐりあう
哀しい身体で

見つめ合つて
鍛えるなんて
ほど遠い出自

掌に滑らせる
程よい硬さの
赤檻の長さで

押して引いて
通り道で杖が
ブレない型に

成して崩せば
生きる螺旋も
メビウスの輪
(14.07.25)

夏山

梅雨明け空に
ヘリの爆音が
遠ざかる辺り

避難下山する
滑落者の影が
背負子で揺れ

未定の没年が
近づくほどに
首折れ彷徨い

茶毘のような
光景で閉じる
老境の鞍部へ

登りはじめの
食べ合わせで
へたり込んで

行程はたせず
眠りこけたら
夕暮に目覚め
(14.07.29)

夏草

朝から真夏日に
背戸の草刈など
身体が反応せず

治療中の歯茎も
嫌がつてから
呑むのも控えめ

草刈バリカンで
69年目の夜空を
虎刈りに染めて

草いきれの中へ
倒れ込むように
抱き合つてたら

獅子舞の杖術で
棒切れのような
擦り傷だらけで

温もつた堆肥の
ミニズで釣りへ
夏草の向うまで
(14.08.01)

振り直し

逃げだす虫の
姿も見えない
むなし草刈

ボールを投げ
あたつた壁に
穴を穿つまで

棒を手始めに
竹刀を振つて
木刀まで手に

斧を振るつて
薪割りならば
田舎暮らしへ

日本刀を手に
抜いて納める
動きも解らず

相手も違わぬ
間合いの故の
抜き差しなら
(14.08.05)

素潜り

蝉声のしない
夏を過ごせば
海も遠のくか

泳げないのに
黒い三角褲で
川音に戯れて

虚弱な身体で
自然な泳ぎを
水底に置忘れ

林間学校など
体育の授業も
見学しながら

身体にとつて
運動とは何か
自問自答して

数センチでも
体内の自然に
潜り込めたか
(14.08.08)

釣果

台風に洗われ
浅く差し込む
陽射しに乾く

屋根を転がり
庄川の河原へ
日除けが伸び

左右いはずれも
ままならない
ターンの数々

曲がりすぎた
嘴を打ち碎き
飛び直せるか

打直す古綿で
肌を磨いても
遠い飛距離で

夏竿が振られ
途絶えた鮎の
塩焼きの香り
(14.08.12)

もてあそばれ
漂うだけなら
文化的孤島で

ホームレスに
別れを告げる
通信が吹抜け

タクシーから
見放されたら
歩くしかない

明治や大正を
生きた祖父や
叔父の暮らしに

書付けられた
間に合わせる
生活思想から

ほど遠い道で
拾い読みした
汗だく回覧板
(14.08.16)

固有像

刷り込まれた
自明のように
揺らぐ樹木が

飛立つように
切倒されても
幻の根が伸び

録音で流れた
校内放送での
自声に戸惑い

録画試合中の
他人のような
我が身の映像

自己を分かつ
身体像を喰う
ゾンビの動き

固有の身体へ
命がけ出逢う
客人のように
(14.08.19)

空調の効いた
図書館で涼む
読書人の戯れ

やつてこない
利用者ならば
上とするべし

その時々なら
中なる利用に
とどまるだけ

いつも入浸る
下の利用なら
見て見ぬふり

下の下になる
居残り利用は
鼻つまみ者に

上客は読まず
中客は借りて
下客は買って
(14.08.22)

尋ね人

寡黙な樹木が
大気を荒らす
雷雨に打たれ

ひげ根の先で
行方不明者の
声を探りあて

葉脈の触手で
画像検索から
割り出せても

解剖列車では
辿り着けない
身体像の果て

気が駆け巡る
自然と存在に
切り裂かれて
おもむくまま
規矩を超えず
氣化する姿で
(14.08.26)

逡巡

季節変わりが
常識的ならば
身体感度にも

声をかぎりの
手をかざして
見渡すかぎり

海と渦の境を
知らない魚が
逡巡しながら

潮目に止まる
海鳥の影から
側線を全開に

深くて静かな
自前の自然が
目覚めた泳ぎ

剣でも刀でも
断ち切れないと
撓みを響かせ
(14.09.02)

黙視

撒水ホースを
使うことなく
八月が過ぎて

秋雨もどきが
こびりついた
土埃を洗つて

出遅れた蝉が
ヨタヨタして
鳴声もかすれ

身元不明だが
俯きながらも
衝立ての陰で

冥想の裸身に
不在を集注し
机上に飾つて

Gパンを脱ぐ
娘の肢体から
氣化する裸像
(14.09.05)

遠足

十七年も待つて
羽化した蝉の
抜け殻の内観

父母が編んだ
型無しの家で
無心が揺らぎ

這い回つても
まだ立てない
関節のあたり

透けて見えた
あばら骨から
滑り落ちそう

囲炉裏端から
転げ落ちない
地図を頼りに

潜り戸を抜け
軒端遊びから
遠出するまで

(14.09.09)

排砂

夏から秋にかけ
雨が西から北へ
土砂災害を連ね

一級水系が五つ
二級水系の数が
三十県内百一河川

土砂災害を防ぐ
砂防ダム効果で
守られる暮らし

テロの標的から
戦場の殺戮から
69年遠ざかつて

干上がらされて
空っぽにされた
条文のダムから

言葉の河川敷に
理念が排砂され
蟹の泡も消えて
(14.09.12)

礼節

不安な朝空の
雲間から抜け
落ちたように

庭木に止まり
曠り交わして
紡ぐ作法から

詰襟学生服を
仕立て下ろし
背広に着替え

心がけ知らず
もたずに稼ぐ
渡世の御衣木

手を合わせて
半身のままで
こじあければ

死者と生者と
互いを思つて
拌み合う幅が

(14.09.16)

すれ

出合えぬ力が
人を見くびり
我身を裏切る

身体を通して
何事かが続く
信と不信の間

見合つた時の
内側が幾層に
擦れ違つたら

虚しく前向き
いま・ここに
戻る繰り返し

整えようにも
何事に対しても
ズレていれば

内部で確かに
動く何かから
順次生の力へ
(14.09.19)

鳥籠

黄色くなつて
タイプを叩く
枯葉の隙間に

吊り上げられ
肌身離さない

幻のクレーン

望遠レンズで
月の裏側まで
井戸を掘つて

とつておきの
螺旋パンチを
汲上げる滑車

胎児の観相で
ワープすれば
腹掛の奥まで

気配を消して
腹が決まれば
腰も入りそう

(14.09.23)

つむじ

行進練習中の
輪の内側へと
摘み出されて

悪い歩き方の
お手本みたい
小学生の足並

行き場のない
グランドから
はみ出しても

若気の辺りを
どんなふうに
歩きつづけて

頭髪のように
歳月に晒され
薄くなつても

体のどこかで
渦を巻きつつ
老いを結んで
(14.09.26)

置物

陽射しから溢れ
置き場所に迷う
ソーラー自転車

吹抜ける風信が
書込んでくれた
稽古法が途切れ

北アルプスから
南下しようにも
腰痛に遮られて

泳ぎも知らずに
走りはじめても
楽しき分からず

急須からお茶を
注ぐよう身を
振り返つて辿り

着込んだ着衣で
隠された廃墟を
駆け抜ける勾配
(14.09.30)

自然人

庭の日だまりで
ホバリングする
虫柱のゆらめき

蜻蛉が止まつた
花付きが少ない
金木犀の枝振り

衰えた羽根なら
羽搏き直すよう
虫取りを繰返し

リタイアしたら
見失つた身体を
見出す言葉から

しばしの間だけ
老いの稽古法で
名前をひも解き

体力を補う術を
遣う気力からも
遠ざかるように
(14.10.03)

雨宿り

遊び呆けていた
縁側から落ちて
覗き見た縁の下

蜘蛛の巣を払い
軒先から一步で
世間の内と外へ

祖父の公界から
母の世間体から
隔てられた仲間

逢引とも知らず
傘も開かないで
束の間通り過ぎ

握りしめた拳が
温かく緩んだら
握手で挨拶して

振返ることなく
一散にかけ戻る
軒端を探し求め

(14.10.07)

あわい

遠足で宮島峡の
ポットホールに
ちりばめられて

コトあるたびに
モノにこだわる
着の身着のまま

二十世紀後半の
事実と事物から
食い繋いだ身体

泥濘に足を入れ
砂利道に躡いて
這い這いを忘れ

裏山の奥深くで
宇宙を見上げて
川原の土手でも

脱ぎ捨てられた
思いの坂道から
這い上がる隙間

(14.10.10)

孫の手

ほどよい空調に
打てど響かない
夏太鼓が遠のき

風が運んできた
窓越しの雲行き
空耳に響いたら

葉っぱが散つて
ギクシャク踊る
モンクのピアノ

静まりかえつた
舞台の袖に立つ
異邦人の体つき

あの手この手で
仮面を剥いでも
型にはまらない

孫との散歩での
影踏み遊びから
取残された踊り

(14.10.14)

早さ

狂い咲きした
木瓜の蜘蛛が
雲隠れしたか

早さを求めて
高速電腦網に
繫ぐ蟄居暮し

産業社会から
追い立てられ
吹き込まれて

一時だけでも
乗り合わせる
束の間の早さ

体感してみて
身体に関わる
字面はどうか

見直す早さは
繫ぎ直したい
躰と體の違い
(14.10.17)

体癖

空模様の崩れを見計らつてもいるような野鳥

暇を見つけては羽根を動かせば、
ところ宿す体で

受容と発信まで日々繰返すなら
様々な数珠繋ぎ

メンバー構成で
多種多様な人が
混在する種目に

性癖が集まつて
癖が見通せない
アンバランスが

唯一の拠り所の
感受時空ならば
身体こそ環境に
(14.10.21)

写生会

光と風と樹木が
交差する水辺の
柔らかい芝生に

滑るように秋の
靈柩車が窓から
渡り鳥を放つて

旅立ちの映画を
解体させる絵で
埋め尽くされた

防犯カメラでも
撮りきれなくて
もてあます運河

小ガモを背中に
亀の真似をする
親鳥がコマ送り

庄川峡の船から
近鉄線の窓まで
走りぬけた紅葉
(14.10.25)

逸脱

途切れた小骨を
たなびかせたら
秋の名残の蜘蛛

忍び寄る野良猫
急降下する野鳥
察知する樹木に

行つたり来たり
振り子運動から
螺旋階段を経て

骨骼を運動して
張り巡らしても
届かない触手で

体内を弄つたら
横超を繰り返し
螺旋に抜け出て

菱形になるまで
飛躍を裏返せば
横取り綾取られ

(14.10.28)

桜と銀杏並木が
日照時間を計り
落葉の音を聴き

紅葉から黄葉へ
沈黙を滑らせる
樹木の心変わり

植物の佇立から
見えない腰痛が
忍び寄る風向き

心因性のようで
抗鬱剤が効くよ
と語った詩人も

すべて体を頭で
制御する錯誤を
指摘する達人も

不可能に見えて
試みるしかない
始源への遡行に
(14.10.31)

地名

霜月の水たまり
跳ねてみようか
飛んでみようか

朝晩寒くなつて
難しい地名など
十一月のタクシー

規定打席に立つ
まだ冷たい手の
子らの脚よ動け

しつかり繋いで
ここぞと攻めて
歌枕になるまで

糺摺りで忙しい
米ぬかまみれの
記憶の畦道から

十一月の傾斜を
三十一文字まで
模写を重ねたら
(14.11.11)

回遊

Y字路で渡され
紛れもない扉の
警句の寄せ書き

家も家族も失い
壊れた門灯から
墓掘り人の手で

きれぎれの蛾が
十字路を照らす
角の灯りを慕い

夜が明けるまで
身を焼く思想を
羽搏かせながら

飛び立つ座標に
アジアを刻んで
群れることなく

身体を見つけた
動きで体現する
地図を畳み込む

(14.11.14)

境界線

矩形と螺旋を
合わせるよう
体で割つたら

今夜も飲干す
グラス一杯の
ジントニック

憂き名を流す
運河を辿れば
水鳥も出払い

羨望鏡を掲げ
図鑑に逃込む
バーズアイに

捨て損なつた
V H S テープの
消し忘れた傷

一週間前から
通りすがりの
B B B で巻戻す
(14.11.18)

凋落

森に降り注ぐ
落葉の視線と
公園に群がる

鳩の饒舌など
どこ吹く風の
昭和の役者に

耐え難き背と
忍び難き胸の
内が銀幕から

戦後を生きた
運河の底へと
水質検査する

潜った水鳥を
追い散らして
遊覧船が過ぎ

取り残された
視線の航跡が
途絶える辺り
(14.11.21)

反転列車

乗り損なつた
面接列車追う
タクシー拾い

果てしのない

行先を問われ
銀河鉄道まで

乗り合わせた
車窓の数々に
指折り数えて

猫の島影から
引き揚げられ
蘇生する少女

宇宙服を脱ぎ
少年の寝具に
目覚めるまで

最後尾に狂い
咲く中間装い
先頭列車まで
(14.11.25)

秋の緞帳が
山肌を梳る
空の向うへ

踏み拉かれ
降り積もる
落葉の音に

泳ぐ視線の
飛行機雲が
搔き消され

立ちつくす
安定の中の
不安定へと

地上に浮く
生活視線で
飛翔を試し

乗っている
不安定から
未安定へと
(14.11.28)

邪魔

随分遠くへ
やつてきて
代り映えが

しないよう
取り繕つて
草臥れたら

出自からの
振替休日に
居直るだけ

束の間でも
踏み迷つて
自信もんき

着込んだら
脱げないよ
無くて七癖

はじまりに
目途のない
助走の果て
(14.12.02)

哀惜

理解しない
人に語れば
無縁な人に

語ることも
同じである
冬の空から

眠らせずに
舞い降りる
感性の秩序

國なる幻に
抗う心から
忍従の街へ

無慈悲なる
自然作用が
架け渡され

今生の繩を
綯うような
言葉の空鏡
(14.12.05)

十二月の雨の
匂いを消して
降り積る雪に

庭で繰り広げ
られた鳥獣の
戯れの跡など

描き残された
余白を見つけ
百舌が舌打ち

忍び寄る猫が
聴きそびれた
屋根の落雪に

目覚めた鼠が
夜の静寂へと
家埃を撒いて

朝焼け鶏鳴に
木登り好きな
山羊の鳴声が
(14.12.09)

十二月の動画で
聴き直させる
雨が霧になり

フェルメール
とラッセンを
居間に吊るし

下駄箱の上で
滑りはじめた
人影の写真も

浮遊するだけ
価値も意味も
コピーに実写

繊細すぎたら
鈍感な展示に
大雑把な閲覧

日々繰り返す
今日の歩幅で
傾きを正して
(14.12.12)

些事

雪下駄脱いで
下駄の歯並び
殴つてやろか

あいつと渡る
吊り橋効果が
覗面になつて

ギターの胸に
飼うメジロの
轡りに踊つた

くし形切りの
皮を下に絞る
指使いが凄く

脱げた靴など
見向きもせず
逃げた屈辱で

色を濁さず
日々組み直す
自画像の裏へ
(14.12.16)

消失

吹き溜りの
平屋根から
片屋根まで

点呼された
雲の足跡が
ひつそりと

冬野菜から
旨味を掘り
下げるから

鍋料理から
冬晴れまで
早回しして

コマ落とす
積雪画面を
区切る除雪

埋められた
文化を探る
行旅不明人
(14.12.19)

竹とんぼ

回転翼なら
一枚よりも
三枚あれば

飛び方から
滞空性まで
拡張されて

竹とんぼで
心の棘など
抜き去つて

浪費の末に
届く高さで
反転すれば

人工昆虫の
空間認識で
人称を写し

忌避すべき
現実からの
距離を飛翔
(14.12.23)

煤払い

夭折者から
現役奏者へ
架橋されて

響き渡つた
ブルースの
川の色合い

赤ワインを
グラスとも
室温に並べ

埃を払つて
温まつたら
鳴らし続け

羊をめぐる
階段の上り
下りを数え

筈に叩きに
足手纏いの
掃除機まで
(14.12.26)

丘陵地を界に
呉西と呉東で
積雪が大幅に

逆転していた
十二月の降雪に
甦る通勤地図

蒸気機関車の
煤煙で煤けた
呉羽トンネル

冬に往復した
積雪履歴でも
東西に分かつ

固有の生死の
波打ち際から
気を燃やして

現世と他界を
乗換えられる
銀河鉄道まで
(14.12.30)

着雪

ネット回線の
着雪を解放つ
庭先の陽射し

むき出された
ケーブルから
孵化した落雪

舞い上がつた
あてどなさに
うめつくされ

一夜明ければ
滅びの先行く
軒端のつらら

埋め尽くされ
雪原に突刺す
孤独な切つ先

溶け落ちず
弧を描く影で
遅らせるだけ
(15.01.02)

破碎

年を越した
雪融け水が
屋根を洗い

雨樋の底を
通り過ぎる
氷河の記憶

削り込まれ
巻き戻され
有無も無く

差し迫つた
大股開きの
暮しの鞍部

身体に潜む
壊滅された
原生林の跡

神話の裏で
病物めいた
語りが碎く
(15.01.06)

放出

棒読みして
見開く度に
読み尽せず

殻に戻せぬ
割れた卵の
温もりの襞

好悪に尖る
拝み取りの
抜き差しで

交叉すれば
押し広がる
生存の証が

元に戻れぬ
出生の襞を
抜き取られ

繰返す型を
動き動かす
花心に体液
(15.01.09)

言葉以前の
体内旅行が
覚束なくて

這い回つて

内臓が唄う

覚えも無く

追い出され

行住坐臥に

居着くだけ

何処へでも

拡散すれば

舞い戻つて

言葉を覚え

乳胎児期を

見失つたら

生涯かけて

振返れない

未踏の出自

(15.01.13)

献立

冬物野菜の
高騰を染め
まな板模様

薄らいでも
七草粥なら
見分けるか

食材などの
知識を刻む
包丁の知恵

昨夜のシチューに
今日の調理パンと
通販の赤ワインで

淡い昼時を
温もさせて
綾なす食卓

明日の献立
未明の手に
滲むレシピ
(15.01.16)

形態

パ) 覧なさいよ
スキーデ和に
腰痛だなんて

バランス板や
道のく山道で
踏み迷つたら

強張る姿勢が
揉み解されて
足裏に抜落ち

意識語りから
無意識語りへ
腑分けされて

書き込まれた
物語を編めば
身体が紡いで

本当の話など
老いの手前で
未知数の明日
(15.01.20)

時間割

一月の空には
西の破れ目に
東の書き込み

多種多様なる
モグラ叩きで
穴ぼこだらけ

心が破綻して
食み出したら
危険物扱いに

1日24時間で
1年365日も
扱えない恐怖

拋ん所なくも
捨て去られた
空虚を呼吸し

見出す空地へ
動きだせれば
抜け出す力に
(15.01.23)

墨跡

記憶のなかの
尋ね人放送が
呼覚ます名前

語源を探して
近代史を畳む
怠けた手付き

縫い合わせて
着込んだ衣を
脱がせた体毛

墨の種類など
使い分けても
躰の処し方が

紙にかすれて
纏わり付いた
動きの跡にも

字体となつて
書き残された
書体が手懸り
(15.01.30)

瞬殺

余りにも短い
接触で決まる
球技の制御に

身動きならぬ
私でない私の
動きが邪魔に

真剣に学ぼう
とする遅滯に
噛み合う歯車

今に取り戻す
技の手掛りが
遅れに隠され

瑣末を棚上げ
臍の反対側へ
回り込むまで

蹴り込まれた
無意識の輩に
打ちのめされ
(15.02.03)

夜明けの空に
貼付けられた
句読点が三羽

！マークなら
驚きの滑りの
今年の初滑り

プロならでは
試して分かる
技あり手入れ

ドローンなら
XYZ三方向を
操作しながら

飛去つた跡を
GPSの受信で
追尾する方位

体内時空計を
飛び立たせて
空撮できたら
(15.02.06)

雪かき

降り止まない
雪空に尾長の
一筆書き飛翔

庭木を揺すり
避け損ねたら
背中で流して

積み上げたら
撒き戻らない
白黒フィルム

立位の極みで
汲上げられた
融雪水の動き

奇麗さっぱり
屋根雪一枚の
跡形も無くし

無心に羽搏ぐ
気力のままに
立ち動けるか
(15.02.10)

螢雪

立春過ぎれば
キーボードの
タッチも変り

雪女が喘いだ
からだ言葉で
本音が芽吹き

雪男が齧つた
あたま言葉の
建前で囮つて

一夜交じりの
雪空いつぱい
螢が舞い散り

行方知らずの
性器が出逢う
アワワ語結び

植物入力でも
変換できない
動物出力なら
(15.02.13)

雪兎

雪上散歩から
滑走するまで
雪深さを学ぶ

積雪3mでも
後ろ足交差で
兎が駆け抜け

季節と交感し
踏み込む板が
融通無碍なら

空を区切つて
輝く帯が結ぶ
水平線の彼方

個の来歴から
世界の果てへ
幻想の架け橋

宇宙への階を
上り下りする
言葉の玉手箱
(15.02.17)

不死鳥

乗り合わせた
人型のホバー
クラフト浮遊

泡立つ航跡に
見え隠れする
魚影を追つて

飛び込んだら
健全と病まで
吃水が表した

闘ぎ合う生と
死が織りなす
海図の領域へ

不安や恐れに
浮き沈みする
未決の船窓で

組み合つてる
偶然の事実と
共存する忘却
(15.02.20)

やりようもなく
途絶えてしまう
不意の死の訪れ

掃除ロボットや
PCのOSならば
アップグレード

どうしようなく
もがきつづける
日々の繰り返し

使い古す老体が
向き合う介護に
悔悟や達成なく

乳胎児期を経て
屈折した青春を
埋葬できようか

伴走しようにも
ゴールなど無く
寄り添うだけに
(15.02.24)

寒氣

泳げないのに
飛び込んだら
誰もいなくて

夏休の午後の
土手で釣果を
刻んだ釣竿に

震えるような
河川敷を抜け
葦の茂みまで

バスを降りて
漁港の突堤へ
弄る海原へと

潮目から逃れ
滑落や雪崩の
難を免れたり

峰から河口へ
新たに書込む
流域に埋もれ
(15.02.27)

刷毛

咳き込んで
破れそうな
冬の障子に

影絵のまま
全身骨組み
塗り込まれ

死の寝相を
書き換える
介護手続き

性の誇りを
吹き払えず
刷毛を探し

体壁を潜る
整体の手も
及ばぬ内奥

穴だらけの
未知の内へ
触れて外へ
(15.03.03)

雪解けの跡を
裏庭に残して
ほろ苦い香り

滝壺の虹から
川底を攫つて
冬の夜を埋め

高所恐怖症は
当て所のない
片道切符から

乗り合わせた
競争相手なら
生きる手立て

戦う姿勢から
ぶら下がつて
もがく足裏で

着地どいろを
掴むに掴めず
羽ばたく足跡
(15.03.06)

徒花

雪中花芽が
徒手空拳の
乱れ打ちか

出会い頭で
先急ぎ過ぎ
出遅れても

集合写真に
間に合って
一斉飛跳ね

打ち急ぐか
当て待ちか
狙い外れて

気づいても
体を割つて
待ち受けて

散る間際に
一花咲かす
気合の枝葉

(15.03.10)

点描

村祭りでの
打上げ後に
花街行きが

温泉街では
やり手婆に
手ほどきを

夜学教室で
四十八手の
透かし絵も

二十五時間目の
イメージが
途切れたら

リタイアに
描き尽くす
画像の焦点

量けるまで
高度を稼ぐ
視線で綴じ
(15.03.13)

いざこでも
春陽が誘う
帆柱が立ち

写し取つた
風穴めがけ
帆布を張り

編みたての
仕分け紐で
海図を綴じ

風を頼りに
抜身で辿る
航海の行方

描く呼吸を
合わせ鏡に
噛み合えば

一笔書きも
向かい風に
乾き上がり
(15.03.17)

春の渡し

庭先で鳴く
春の制服を
着込む動き

庭木に訪れ
花ボタンを
はずす小鳥

胴体と頭を
交差させる
欲望のY字路

俯瞰視線で
手足が動く
胴体の高度

解き放たれ
五感が働く
開放値まで

張り渡して
引戻される
枠組みまで
(15.03.20)

無構え

営業停止の
スキー場に
積もる新雪

父性が埋れ
閉ざされて
読めない頁

崩れ落ちた
未踏の壁に
刻み込まれ

手足を掛け
身を細めた
日々の隙間

装丁された
言葉の扉が
開け放たれ

覗き込めば
降伏しない
流今の斜面
(15.03.24)

通過

理科室から
抜け出した
人体模型が

手を振つて
在来線から
新幹線まで

入れ替わる
俯瞰視線で
描く扇状地

ヒトの体が
隠し持つた
系統図から

校舎の窓に
汲上げられ
張り出され

言葉の影を
なぎ倒して
通過する橋
(15.03.27)

偽装

日差しと陰の
折り目を探す
季節の縫い目

縦にまとまり
横に働くなら
遠くの風見鶏

風向き次第に
畳んだ風信を
折り紙細工に

背伸びし散り
止められない
梅の木の剪定

横つ飛びなら
枝から枝へと
花に落ち着き

満ちる動きが
鳴き合わせる
匱作の呼吸で
(15.03.31)

分身

石礫の叫びが
暗雲を割つて
墮ちてきいたら

小鳥が軒先で

春の嵐を避け
揺れる電線に

封印を解けば
切り結ばれる
交差する凹凸

意味と価値の
双葉が伸びて
同一性障害に

身構えるから
今日が一番に
綴られるだけ

旬の貝を剥き
味わい尽くす
身がままなら
(15.04.03)

出戻り寒波が
花びらで編む
筏を通り抜け

姿勢を試して
際どい安定に
居着けなくて

的をめがけて
引き絞つたら
間髪の間合い

気づくことを
放棄している
達成感のなさ

触れない水が
描いてみせる
水かきの動き

動機で埋めて
掘り返される
無意識の井戸
(15.04.07)

土手桜

老いを重ねた
親指が出会う
人差し指まで

踵から手首へ
回内と回外で
管を卷いたら

折り曲がつた
腰付きの手で
拾う桜の枝が

抜身のように
空に向かつて
解き放たれる

自在な裏表が
掴みとられた
散り際の感触

仕上げの握り
次第で変わる
指先の切れ味
(15.04.10)

急須

二枚貝が開く
速さで消える
砂地の模様に

孤島に止まり
弛緩と緊張を
繰り返すだけ

風が迎え入れ
転変する波が
収束する岬は

忘れ去られた
小指の記憶で
探る胎内記憶

囲炉裏端なら
湯飲みに注ぐ
お茶の手応え

漬け物を摘む
指使いならぬ
箸の使い勝手
(15.04.14)

散り際から
芽吹きまで
否定の嵐が

生活身体が
書き損じる
違和と同致

言葉の裏に
打消す速さ
発語を連ね

動きを繋ぐ
関節が否を
解き放てば

関わりとの
別れだけが
暮らしの証

自然治癒の
歯車が働き
痛みも消え
(15.04.17)

木立を抜け
渡り鳥らが
季節を畳み

山川草木が
内臓感覚を
際立たせて

手渡された
山菜が匂う
濃い山影が

落ち葉から
木の根まで
さしこめば

聞こえくる
色文字響く
溪流の眺め

釣り上げた
魚の動きが
点描する句
(15.04.21)

分岐

揺らめいて
山肌を隠す
折り紙細工

狭い糊代を
折り返して
畳み直せば

雪崩の跡を
綴じ込んだ
雪渓の傾き

鞍部を辿る
行きがけの
浮力に溺れ

紙から竹へ
飛行機雲を
架け渡せば

引き抜かれ
往路を分つ
重力の在処
(15.04.24)

下流

春の車窓を
緑の滑りに
艶出しされ

水かさ増す
夕暮れ前の
街中の川縁

引込み線に
置き忘れた
手触りなら

頭を埋めて
身動きない
番いの水鳥

写り具合も
眺めないで
再会の宴席

散会までの
瞳と言葉を
集合写真に
(15.04.28)

胴乱

標本を探し
野山を歩く
虫眼鏡から

エロ目線で
春画を集め
スクラップ

電腦広場の
架空の闇で
星座を探し

裏返された
望遠鏡覗く
虫の手触り

図鑑からの
獲得視線で
分類すれば

脱皮の域を
境界にする
展示室探し
(15.05.01)

最盛期でも
映画館から
遠かつたが

思惑が囮う
妄想の闇の
狭間の無形

膝を曲げて
尾てい骨で
しゃがんで

稽古せずに
立てる謎が
能力の死角

恥じらえは
伝統技能や
武門が開き

虚しくとも
音楽ほどに
浮きがかり
(15.05.05)

残響

連休明けて
未だ聞かぬ
鶯や雉など

ツバメ飛ぶ
代搔き田に
山肌映して

遠い講演で
ダイカキと
響いた声に

模造紙など
三度ばかり
枚数を数え

つなぎ目を
丹念に読み
返す日々に

連鎖させた
関節が繋ぐ
動きを畳む
(15.05.08)

前兆

新緑激しく
立ち騒げば
家鳴りして

産道抜けた
空気呼吸に
恐れが舒し

過呼吸など
呼び覚ます
境涯に迷い

止まる枝を
聞き違えた
鶯の初鳴き

空耳ぬけて
生存予見の
地獄耳まで

響き連なる
存在倫理を
刻みこんで
(15.05.12)

蟻とフラミンゴ

蟻を追つて
アフリカの
火山湖まで

藻に染まり
數えきれぬ
フラミンゴ

織り込んだ
人工都市の
夢を畳んで

出会うまで
仕草で紡ぐ
群遊飛翔図

雌雄を繋ぐ
赤い無意識
立ち騒いで

解れた糸を
番の飛翔で
染め分けて
(15.05.15)

宙に浮いた
クラゲなら
春の蜃気楼

浜辺を抜け
遠い幼子が
駆け寄つて

革命期など
忘れ果てた
消費産業化

〈デモ以上、
テロ未満〉
見得を貼り

無人飛行機
浮かばせる
個人と国家

出現予報に
踊らされた
日々が霞む
(15.05.19)

飛び縄

練習前と
やりだして
半年もたず

一人飛びで
無意識から
自意識まで

三人以上は
大繩跳びで
足並み揃え

二人飛びに
気づいたら
足がもつれ

絡まつても
縄張りなら
三様の縛り

解けるよう
三本の縄の
重みを変え
(15.05.22)

手解き

五月なのに
暑さ勝りて
田植えの指

屈み込まず
苗を摘んで
泥をも掴み

踏み込んだ
棚田の枚数
足指で挟み

動き方など
数えるより
数え方から

手足を通す
衣替えまで
動態作法を

塗り替えて
動き動かす
お掃除ロボ
(15.05.26)

姿勢

朝の街中で
振り返つて
紫陽花咲き

玄関を出て
振り向けば
どちら向き

自転車でも
スキーでも
急停止なら

回りこんで
ホツとする
身体の傾き

無意識から
浮かび出た
寝相のよう

上下左右に
見回し探す
楽な姿勢が
(15.05.29)

縦横

六月の緑が
しつかりと
枝を張つて

素晴らしい
発想を生む
出会いを支え

半世紀過ぎ
扉を揺らす
誕生月の闇

胎内姿勢の
つながりに
別れを告げ

鰓呼吸から
切り替わる
恐怖の叫び

未熟なまま
自然の間に
果てしなさ
(15.06..02)

息災

赤や白や泡
ワインなど
飲み分けて

姿勢も和む
食卓を囲み
安堵の合間

草を筆つて
庭に絶えた
半夏生の姿

巡る季節の
生きやすさ
探し求めて

立居振舞い
どんな形に
見初められ

四畳半から
母が見せた
介護の間取
(15.06..05)

五月を捲る
接続詞から
始まる言葉

届けられぬ
瞳の奥へと
待ち合わせ

読みさしの
閉じた本に
隠した思い

幼少期から
見出せない
平穏に疲れ

座りこめば
擦り切れた
畳の縁まで

鼠を追つて
青い蛇行が
六月を開く
(15.06..09)

古今

夜来の雨が
緑を濡らす
母の月命日

老いてから
春と秋には
京都を訪れ

神社仏閣の
観光を残し
アルバムに

母子一緒の
京都旅行も
介護の夢見

癒しお祓い
閉ざされて
書架の奥で

紙やケした
古都を読む
与謝野源氏
(15.06.12)

青雨に黒雨
変わる場面
違う身体に

動かぬ外側
盛んな内側
休憩に休息

見出されて
乗り込めば
矢面に立ち

思いを越え
降つてくる
善悪の判定

詩を詠めば
日頃の命題
かき消され

夢で出会う
私のいない
世界を見て
(15.06.16)

体軸

曇り空から
梅雨入りは
未だですよ

電線揺らし
囀る小鳥の
糞を避けて

虫食い葉に
やつてきた
紫陽花の花

不揃いでも
季節ならば
あやふやに

すっぽりと
乱れた軸の
歪み和めば

非対称から
整つてくる
姿勢の葉脈
(15.06.19)

落ち梅

庭の片隅に
咲くバラを
一輪挿しに

飲みさしの
ボトル近く
並べ置いて

異変を知る
ブドウ畠の
バラを遠望

雨に濡れた
重みで傾く
花弁が震え

梅雨晴れの
庭を横切る
戦後の履歴

落ち梅なら
拾い集めて
誰の手元へ
(15.06.23)

捨鉢

樹齢不詳で
雨に濡れる
祖父の捨鉢

祖父を診た
往診医には
それつきり

閉院を知り
生老病死の
由来知らず

母の介護で
縁があつた
訪問医とは

在宅養生の
話の続きも
聞かぬまま

等身大まで
生身を探す
自問自答を
(15.06.26)

上半期

半身になり
振り返れば
半夏生の影

非対称へと
溢れるまで
立ちつくし

上から下へ
紐解かれて
常識の流域

気も高まる
変形譚なら
祖母の昔話

孫に付いて
引っ越した
祖父の同意

翻すならば
水平または
垂直に反転
(15.06.30)

乗り手なし
自転車でも
倒れず走る

砂利道から
草つ原へと
併走したら

追い越され
取り残され
思春期から

掘り当てる
呼水で洗う
姿勢の渴き

飲酒喫煙に
女遊びから
癒されても

身体に潜む
逃げ水から
溢れる体位
(15.07.03)

未踏峰

新緑を占う
盆栽が残す
謎のように

持ち越され
日々振舞う
自らの不明

天井棧敷に
ぶら下がる
立ち位置も

垂直回転で
逆様になる
夕焼け写真

渡れそうで
掴み損なう
雲の手触り

鞍部に立ち
見渡す限り
初登頂の夢
(15.07.07)

無免許

乗つてみろ
促がされた
自転車小僧

稲刈り終え
農機具屋の
単車に跨り

駐在を避け
人気のない
初体験試走

草も枯れた
通学路へと
突っ走つて

農道へ曲り
切れないので
突っ込んだ

刈田の畔を
倒れそうに
乗り越えて
(15.07.10)

構図

幻の庭師が
緑濃くなる
庭木を整え

権力の枝に
強いられた
自由と恣意

見回す限り
緩んだ籠の
桶の不自由

強制された
関心或いは
無関心から

バラバラに
動く手足が
連結し得る

構図が破れ
時空の壁に
穴を開けて
(15.07.14)

無抗原

七〇年を経て
夏に枯れた
盆栽の枝振

道路を隔て
咲き揃つた
芙蓉の翳り

二つ重なり
吹き寄せる
予報円から

風雨に晒す
気圧が示す
体調の行方

鉢を割れば
ねじれ果て
絡む根つ子

夜陰に紛れ
地に墮ちて
割れた理念
(15.07.17)

猛暑で花が
萎むように
紙袋が破れ

苦しい時の
神頼みから
解き放たれ

車椅子から
転がり込む
診察ベッド

ストレスが
見当たらず
問診途切れ

誕生でなく
出会いでも
欺かれたら

気づかない
トラウマが
ストレスに
(15.07.21)

午前的小舟

浮上したら
覚えてない
夢のかけら

朝の儀式で
組立て直す
生身スーツ

落とし込む
肩で開けば
肋の落下傘

ヨメが賄う
朝の食卓を
骨盤で支え

風を使りに
乗り込めば
手足で漕ぐ

舳先が揺れ
浅深問わず
雇の船着場
(15.07.24)

虫捕り

夏草刈りで
追いたてた
昆虫の行方

虫捕り網に
絡め取られ
われを忘れ

標本ならぬ
スケッチが
虫籠代わり

走行距離を
忘れるまで
書き写して

つまされた
身代わりの
季節列車が

運ぶ体調の
個室で問う
痛々悲しさ
(15.07.28)

虚弱児でも
夏が好きな
過去形の朝

ロボットに
リビングの
掃除を任せ

イチジクや
柿に栗など
跡形もなく

茗荷を残し
生い茂つた
背戸の草刈

虫が隠れる
草いきれに
弧を描いて

水を撒けば
匂う砂利道
夏の逃避行
(15.07.31)

蔓草

目立たない
冬の雪かき
夏の草刈り

春蒔き種を
収穫の秋に
空高く放ち

SNSの網に
蔓延る虫を
衛星で察知

既視感漂う
未明の空に
夏の通し柱

削り出した
権を操つて
富山湾まで

演じきれず
浮かんだら
記号みたい
(15.08.04)

初飛行

連日の降雨
予報外れに
雨乞い散水

葉裏震わせ
蝶の羽化が
削り出され

羽ばたけば
放水の影が
虹色に濡れ

少年の手が
埋め残した
身の置き所

思春期歪む
破碎帶から
冷たい炎が

炙り出した
身丈で図る
共感滑走路
(15.08.07)

夏の響き

夏の噴水越し
ビルの窓磨く
人影託す命綱

幼児を抱く
母の散歩の
影を濡らし

携帯を耳に
営業マンの
足跡が乾き

遠ざかれば
田舎の夏の
庭の水撒き

震える手で
組み立てた
鉱石ラジオ

有線越しに
聞き逃した
音楽を探す

(15.08.11)

郷愁

稻穂を濡らす
雨の静けさに
滲む夏の縄文

アフリカ的な
自然体が開く
自由な暮らし

夢見る前から
聴くも語るも
身体をあづけ

繰り返される
いま・ここ
の足踏みに迷い

身の丈で習う
直立歩行から
四つ足の記憶

狩猟と定住へ
明暗を分けた
郷愁の空間に
(15.08.14)

出かけるまで
出かけてみて
出かけなくて

変わらなくて
変わるもので
変わらないで

関わらないで
関わっている
関わり知らず

差があつても
差がついたら
差がなさそう

触れたようで
触れないまま
触れ過ぎたら

めくれそうで
めくられないと
親子世代相関
(15.08.18)

晩夏

電線に群がり
稻穂のように
鳩首を揃えて

山地から下る
アキアカネの
飛来を待つか

再開発新駅の
賑わいを抜け
山地の墓参で

黒と金の線を
思い出させた
ハグロトンボ

猛暑の中休み
夕方の散歩で
寄り添う風に

吹き寄せられ
羽根を休めて
留まれ秋帽子

(15.08.21)

一輪挿しから
抜き忘れる
回転翼の枚数

ウレタン製の
模型飛行機で
滑走路を試し

夏休み工作に
用意したまま
未開封の口ボ

届かなかつた
書架の絵本の
改訂版が出て

やり直せない
書き直せない
生命のもつれ

一枚と三枚で
飛ばし比べた
原っぱの不在
(15.08.25)

結び目

細く長くても
太く短くても
枯れてからに

親鳥の魅力が
雛鳥の庇護を
呼び寄せたか

離別してから
親心子知らず
関係の網の目

朝に眺めても
夕べになれば
墮ちてしまう

庭先の芙蓉を
掃き集めれば
夏の虫の死骸

釣り上げれば
水と餌が描く
糸と釣竿の弧
(15.08.28)

壁抜け

昨夏の風を
忘れていた
船出のよう

生活視線が
張り巡らす
デモの分散

ベルト締め
タオル結び
ヘルメット

遠い戸棚に
置き忘れた
身分証明書

家を離れて
職場からも
離陸できて

俯瞰視線で
身包み剥ぎ
声を挙げて
(15.09.01)

築数十年を
巡り越した
佇まいにも

庭木剪定で
癒されてる
夏の疲れが

住居からも
身体からも
明かされず

振り返つて
語られない
老いの消息

短い来し方
日々重なる
一日の深さ

ご老体まで
季節で測る
違和に耐え
(15.09.04)

過ぎし夏の
掌を返せば
葉裏の響き

無さそうな
隙間からも
調べが漏れ

共感せずに
反転しない
他者の訪れ

寂しい宿に
灯をともす
旅立ちの声

有り得るか
有るべきか
架橋できる

頂を極めて
呼吸すれば
緩む身体像
(15.09.08)

吐息

昼にスキーや
サイクリング
夜はバドなど

あたりまえに
していた体を
しまい忘れて

忍び寄られた
他者と交わす
挨拶も知らず

軽くて重たい
飲み残された
ボトルの中味

頂きますから
ご馳走様まで
締め括る介護

ありがとうを
朝夕繰り返す
畏れのよう
(15.09.11)

古い目

常願寺と神通
両河川を又に
自転車で駆け

張り巡らした
ルートを編み
ハンモックに

透けて見える
ペダルの軽重
扇状地の傾き

仰ぐ山肌から
降りる紅葉が
身体を染めて

枯れ葉の舟で
散歩代わりに
漕ぎ出す流域

高齢化の窓を
揺らす眺めに
拭き取る言葉

(15.09.15)

周回

風まかせに
なだらかな
お椀が揺れ

鞍部が開く
稜線を辿る
未読の足跡

意識された
ダム放水に
無意識の虹

飲み水から
溢れそうな
災害と事件

因果の果て
脇に落ちず
迷路の呼吸

周回遅れの
幼児性なら
父親代わり
(15.09.18)

振り返れば
あつという
短かさだが

いまここに
佇む影なら
長く伸びて

飢餓からは
免れ得ても
空腹からは

法も国家も
常識までが
有為転変で

善悪いざれ
模倣の渦が
弄ぶ身体へ

はみ出して
腹が据わる
きつかけが
(15.09.22)

滑空距離が
短くなつた
離陸と着陸

遅ればせの
同じ手順が
繰り返され

風まかせの
赤トンボに
先を越され

並外れでも
低空飛行が
保てるなら

無芸徒食の
航続距離で
昼夜を跨ぎ

不時着する
芸を頼りに
擦れ違えば
(15.09.25)

巻きとれば
抜け落ちる
夏庭の残水

観覧車から
電子書籍へ
張り巡らす

中秋の貞に
手足を緩め
耳を澄まし

障子越しに
カマキリの
影が動けば

時空を染め
秋の収穫が
五体に響き

体内を抜け
飛行機雲が
角度を決め
(15.09.29)

柿もぎ

古網戸から
メッシュを
剥ぎ取れば

人差し指と
親指からも
見放されて

棒を掴めば
たわむ腕の
自在な手首

身体操法の
序破急から
起承転結へ

指が互いに
反り返れば
足で掴める

四足歩行の
記憶を辿る
柿の木登り
(15.10.02)

新しい靴で
裏山めがけ
けり込んだ

秘密基地に
遅れそうな
古い楕円球

グランドを
横切つたら
見咎められ

怯えそうな
革靴を脱ぐ
裸足の反抗

鉗の眼から
脱げそうな
窮屈な制服

止めに入る
部長の言に
同郷の響き
(15.10.06)

岐路

カモシカに
秋の山道で
遮られたら

木陰からは
のつそりと
ヒキガエル

狭い洞窟に
ぶら下がる
蝙蝠の気配

樹木の陰で
ムササビが
夜を待つて

飛翔夢から
墜落夢まで
繋ぎ合わせ

還り道探す
止り木なら
天狗の団扇
(15.10.09)

構え

幹竹割の
股間から
十文字に

宇宙まで
解き放つ
シャトル

放物線を
手放せば
ジグザグ

縁を繋ぐ
関節技で
躊躇られ

気付かぬ
病原菌の
体内抗争

縄張りが
息遣いを
締め上げ

(15.10.13)

綾取り

壁際から
振り向く
窓際まで

秋の午後
手を休め
机の向き

座席から
出席簿が
印刷され

ID漏れの
足音から
はみだす

疑問符が
識別子の
誘い水に

指を洗い
手を変え
縄を編み
(15.10.16)

痺れ

咲き乱れる
コスモスの
河原に埋れ

川面を叩く
釣り糸から
鮎の煌めき

秋祭りから
遠のいても
匂う襟足が

脚を解いて
橋の袂まで
川面を渡り

群がる鳶が
輪を描けば
橋桁が揺れ

水音を裂き
突き刺さる
夕暮れの光

(15.10.20)

なぞる

蜜柑の皮を
剥くように
ひもとけば

軸の握りに
息も乱れて
姿勢も崩れ

急須で注ぐ
指づかいに
なだめられ

文字の林を
細かく捌く
和紙の籠で

指を染めた
墨を含ませ
切り込む刃

言葉の樹を
削り起こす
筆遣いまで
(15.10.23)

玄関先では
モニターが
触手を休め

影を舐めて
塗り上げる
日差しから

横切る猫や
宅配に紛れ
木犀の香り

吐息で貼る
紙飛行機の
安定姿勢で

脱ぎ忘れた
下駄履きも
竹馬からも

かかと先が
下駄箱深く
刻み込まれ
(15.10.27)

残量

秋の虫の声が
途切れそな
枯葉だまりに

自己嫌悪する
數え切れな
着メロの響き

危うい残量を
モニターする
夕暮れの車窓

不安定ならぬ
立ち位置から
振り返るには

模倣しかない
とつておきの
ロー・アングル

一つしかない
入り口からは
見えない出口
(15.10.30)

有明の月に
寝起き姿を
浮かばせて

漕ぎ出せば
素手で交す
挨拶の岸辺

♂と♀との
ビットから
編まれた幻

母の搖籃で
掴み取つた
匍匐の手足

距離を掴み
形を舐める
異数の組手

結ばれては
解きほぐす
紐に縛られ
(15.11.03)

ベンチから
忍び寄つた
不審な問い

間引かれた
行く末から
取り出され

問い合わせが
雑踏に紛れ
搔き消され

空の言葉が
立ち位置に
差し戻され

通り過ぎて
振り返つた
信号の明滅

傾く西空に
別れを隠す
帰路の挨拶
(15.11.06)

コマ割り

木を数えて
分け入れば
木靈を聞き

割つて入る
桐の花匂う
裏庭の日陰

学校帰りに
通り過ぎた
映画館から

連れ帰つた
身包み剥ぐ
夢見る半身

一刀両断の
手ほどきを
祖父の姿に

絵と心情を
繋ぐ会話も
切り刻まれ
(15.11.10)

外野にて

シーズンが
終わっても
擦過音響き

試合前から
追いかけた
打球の行方

球場の外へ
駆け出して
取り損ない

捕球姿勢で
野次を拾い
投げ返せば

届きそうな
始球式では
呼吸を整え

芝生席から
ずり落ちて
広がる視野
(15.11.13)

散歩帰りを
待ち受けて
寂しい蜘蛛

広げた脚に
鈍い朝陽が
照り返して

昨日見つけ
網を破らず
庭の落ち葉

拾わないで
ありのまま
やり過ごす

ご近所から
紅葉便りが
密かに届き

元気な姿が
角を曲がり
網の彼方へ
(15.11.17)

右手のこと
左手のこと
お互い無視

足の親指は
反り返つて
俯く指四本

突つ掛けと
スリッパの
はき心地で

階段の上り
降りが違う
足裏の感覚

無節操でも
構成各部が
協働すれば

出会い頭の
二体で育む
第三体から
(15.11.20)

無縁

波打ち際で
ヤドカリが
脱ぎ忘れて

水鳥が啄む
氣後れやら
當て所なさ

週休二日で
働く価値が
消費価値へ

コンビニで
食いつなぐ
派遣労働者

家族からも
友人からも
切り離され

携帯電話が
人を新たに
デジタル化
(15.11.24)

通り慣れた
橋を渡つて
午後の往復

水鳥一羽が
川面を叩く
土手を隔て

薄墨色めく
夕空を埋め
電線に群れ

羽ばたけば
黒い骸骨が
真つ暗闇に

貴種を流し
卑種を沈め
川沿いの街

路地裏辿る
足取り探す
町内案内図
(15.11.27)

手作り極め
土塊を払い
虫食い削り

それぞれの
冬の野菜を
貰い受けて

新聞紙など
畳み直して
過ぎ越せば

手作りでも
中途半端な
権で操つて

閉じた本に
隠した身で
街頭に群れ

網の目から
血を流して
神経尖らせ
(15.12.01)

行きざり

死者を畏れ
霰をはじく
庭の雪つり

消える音に
耳を澄まし
未聴を訊き

射竦められ
体内回路に
回避すれば

人馬一体へ
駆け抜けて
異類を喰み

身体で数え
ない計算で

仕詫けられ

世にも稀な
文字使いが
紡いだ言葉
(15.12.04)

原住民なら
死に場所が
見極められ

自然と同化
したような
枯れ木へと

成長すべき
違和を刻む
波紋に隠れ

捲り返した
年輪で働く
知恵の外へ

消費の旅を
ゆきゆきて
植物の如き

導管を抜け
藍染の空を
獣のように
(15.12.08)

戦国武将が
越えそうな
積雪薄い山

スマホ静寂
埋め尽くす
定期バスを

留学生らの
英語混じり
叫喚が埋め

川面を染め
暖冬模様の
夕闇に沈む

戦争を語り
消息を断つ
先人物書き

薪割りから
雪かきまで
一足飛びに
(15.12.11)

枯れ枝から
病葉を抜け
葉脈の渴き

普段着から
抜けだした
暖冬の夜空

汲み上げた
季節外れの
遊覧船まで

形をなぞる
星座の影へ
加速すれば

体内深くを
擦り抜ける
探査船まで

今日を限り
改訂された
絵本の生命
(15.12.15)

過不足

渦を巻いて
鳥が水浸し
の空を埋め

読み込めば
推理が働く
ブランド

個人文庫に
閉じ込めた
日本の養子

食み出さず
体いっぱい

美德と悪徳

昏迷を碎く
激流の闇が
船底を叩き

見逃された
厄災に絡む
無関心の病
(15.12.18)

短い日が
差し込む
床の間で

夫婦鷹が
羽搏きを
閉じ込め

腰に潜み
幹を掴む
脚の付根

児童期を
境にして
着物忘れ

結婚して
着こなす
松の内に

見えない
袖丈から
言葉溢れ
(15.12.22)

分身

切り抜く
身体から
複製まで

数少ない
言葉での
やりとり

出かけて
見いだす
人称へと

心ならず
掛かつた
技のよう

骨格まで
導かれた
足型の跡

歩き方が
成り立つ
姿勢の謎

(15.12.25)

過ちて

小屋根や
植込みを
渡り消え

残された
子羊らの
初雪の跡

一コマで
刈り取る
非常勤務

誰からも
信頼され
ていない

1／4欠け
ケーキの
存在感に

忘れたら
塗り込む
初心の味
(15.12.29)

地名

十字路で立ち話抄二〇一四年一月～二〇五年十二月

発行 二〇一六年五月一日

著者 吉田惠吉

編集・発行

〒939-8036
高屋敷731-6
吉田惠吉

富山市